

令和2年9月30日

ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社 (WDCJ)
ブロードキャスト・サテライト・ディズニー株式会社 (BSD)

第34回 ディズニー・チャンネル/ディズニーXD 放送番組審議会議事録

- ・日時 令和2年7月
- ・開催方法 新型コロナウイルスの影響により書面にて開催
- ・参加者 審議委員総数 8名
参加委員数 8名

(参加委員名)

- 委員長 山田 顕喜 (日本大学芸術学部映画学科元教授)
- 副委員長 前田 耕作 (生涯教育新聞社代表)
- 委員 木下 美子 (元青山学院初等部英語教諭)
- 委員 土屋 礼子 (朝日新聞社 執行役員 企画事業担当 兼 企画事業本部長)
- 委員 名越 康文 (精神科医・評論家)
- 委員 藤田 興彦 (公益法人児童育成協会理事長)
- 委員 三枝 幹夫 ((株)オリコンME WEB編集本部 ORICON NEWS 編集部 編集長)
- 委員 阿部 京子 (ナレーター・キャスター・(有)タイムリーオフィス代表)

ディズニー・チャンネル

(衛星基幹放送事業者：BSD、番組供給事業者：WDCJ)

ディズニーXD

(番組供給事業者：WDCJ)

- 小林 信一 (代表取締役社長、BSD)
- 藤 慶英 (メディア戦略 シニアマネージャー、BSD)
- 伊藤 由起 (編成、WDCJ)
- 竹内 文吾 (編成 マネージャー、BSD)
- 待鳥 雅之 (編成 アシスタント・マネージャー、BSD)

- ・議題 (1) ディズニー・チャンネル及びディズニーXD の番組編成について
(2) 審議番組
「ふしぎの国 アンフィビア」
「マーベル アベンジャーズ：ブラックパンサー・クエスト」

・議事内容

(以下、* : 委員からの意見・質問、→ : ディズニーの説明・回答)

(1) ディズニー・チャンネル及びディズニーXD の番組編成について

→ディズニー・チャンネルでは、オリジナル・ムービー「ゾンビーズ」を日本初放送。

(2018年5月に初放送した「ゾンビーズ2」の続編。“他人と違う”、“普通と違う”そんな人間とゾンビの高校生の出会いから、自身のアイデンティティーを確かめつつ、周囲の意識も変えていく、青春ミュージカル。)

→初放送日は、前作「ゾンビーズ」との連続放送。また、同日に、8月からスタートするアニメーションとドラマシリーズの先行放送も実施して盛り上げる。

→ディズニーXDにおいては、7月20日より、夏恒例の「スゴナツ」と題した夏休み編成を開始。「ダックテイルズ」「フィニアスとファーブ」「リロ アンド スティッチ・ザ・シリーズ」「ミュータント タートルズ」「カンフー・パンダ ザ・シリーズ」などの人気シリーズがたっぷりの見られる連続放送による編成。

*最近テレビを見ていて、環境破壊が進み過ぎていると感じるので、地球環境の保全やそのほか様々な社会問題への取り組みを啓発するような番組の制作も強化してもらえたらと思う。

(2) 審議番組「ふしぎの国 アンフィビア」及び「マーベル アベンジャーズ:ブラックパンサー・クエスト」について

・「ふしぎの国 アンフィビア」

放送概要 :

2019年8月2日(火)に2話先行放送、同年9月よりレギュラー放送。

約22分×20話～

番組内容 :

13才の少女アンの不思議な冒険の物語。ある日アンは、カエル柄のオルゴールを開いた瞬間まばゆい光に目が眩む。気が付くと、カエルがしゃべり、巨大な昆虫が襲ってくるふしぎな世界に来ていた。そこは、カエルの国アンフィビア。アンは元の世界に早く戻りたいが、この国の出口へ行くための山越えが2ヶ月ほど出来ないらしい。そこで、アンフィビアで最初のともだち、カエルの少年スプリグの家でしばらく暮らすことにするが…。

→クリエイター&製作総指揮は、マット・ブレイリー(代表作:「怪奇ゾーン グラビティフ

オールズ」など)。

→カエルの国“アンフィビア”に突然やってきた人間の女の子。なぜこの世界に来たのか、果たして元の世界に戻ることができるのか、その秘密を解くカギは“友情”にある。

*出会った仲間と協力するという内容で、中学生の子どもでも夢中になれる内容。幅広い年齢層に受ける作品と感じた。

*もうすぐ夏休みのため、家族で楽しめると思う。

*助け合うこと、支え合うこと、そばに居る、率直な意見を交わす、協力して困難に立ち向かうといった、友達や友情といったものの大切さや意味が伝わる。

*色彩もエキゾチックで、不思議な魅力がある作品。

*モンスターを退治するくだりが面白い。

*ひとつの目的に向かうことで少女とカエルの間に友情が芽生える。友達を持つことの大切さが描かれている。就学前児童にもぴったりの冒険物語。

*主役の13歳のアンをもう少し可愛げのある姿にしてほしかった。

*セリフがややきつuitと感じるので、対象年齢を少しだけ上げたほうが良いかもしれない。

*だが最後に、アンの友達が捕まっていることが判明し、この後の展開が気になる作品。

*アンは、スプリグと一緒にいることにより、本当の友情を知っていくのだろうと感じた。

*ちょっとダークな雰囲気があるのが良い。

*いわゆるミッキー的な路線ではなくドナルド的なというか、Disneyが大切にしているもうひとつの裏の得意技的な表現が良い。子どもたちは少しグロテスクなものが好きだったりする。

*そういったものを中途半端ではなく、ファンタジー的な雰囲気や背景など細部にいたるまで、非常によく表現されている。

*カエルは皆好きだが、実際には子どもたちは彼らに触る機会が少ない。そうしたものに触れて面白いと感じることで人間の力が湧いてくる。それなのに、今は気持ち悪いものを排除してしまうので、こういった作品を見て学んでほしい。素晴らしいと思う。

*退屈させない内容。

*現実世界で少し浮いていた存在が異世界に行って自己実現するという展開はよく見るが、この作品ではその逆で、アンのほうが向こうの世界で浮いた存在になるという展開が面白い。

*個人的には、最も“次”が気になる作品。人間の女の子と、異世界の怪物の触れ合いを通して、それまでの“友情の定義”に疑問を抱いていく様は、非常にリアル。

*”対価を求められる友情”と”無償の友情“…現実世界においても、我々は常にこの二つを行き来していると言っても過言ではない。

*衝動に身を任せ、全てが異なる2人に友情が芽生えますが、必要以上に劇的な台詞が無く2人ともクールなのが、これまた程よいアクセントになっていて素晴らしい。ギャグ要素もふんだんに詰め込まれており、キャラクターの動きもカートゥーンマナーに乗っ

取った素晴らしい動きでした。

* 幼児から中学生まで楽しめる作品で、友情や助け合いのテーマがわかりやすい。全体的にはキャラクターも好評を得られると思われる。

・「マーベル アベンジャーズ：ブラックパンサー・クエスト」

放送概要：

2020年3月1日（日）21:30～から放送開始。レギュラー枠は土日21:00～。

各22分×23話

番組内容：

突如、正体不明の脅威がワカンダ王国に襲い掛かる。これまでの同盟関係や慣習、そして仲間たちから距離を置き、天才科学者でもある妹のシュリとともに、民衆と祖国を守るために立ち上がる、ブラックパンサー。若き国王、ヒーロー、そして一人の男として自らの使命を果たすため、見えない敵の真相に迫る！

→本作は、アニメーションTVシリーズ「マーベル アベンジャーズ」の第5シーズンで、ワカンダの国王ティ・チャラ／ブラックパンサーを主軸にしたストーリー。妹のシュリ王女、義兄のホワイトウルフとの絆やワカンダが国家となる以前の祖先の時代にさかのぼり、一族の過去の事実が昭名になっていく内容。

→作品の見どころは、アベンジャーズとの友情と軋轢、主人公ティ・チャラのヒーロー／国王としても重圧と葛藤、平和への願いなど。

* 大人も夢中にさせてくれるのは良い。

* ブラックパンサー、ハンターの二人の過去のわだかまりを乗り越えて協力する姿、妹のシュリがその間を取り持つ、三人の兄弟愛が見られる。苦しい時には家族が助けになるというメッセージが伝わる。

* 黒は悪やダークな印象を抱く人が多いものだが、本作では正義の味方として描かれているのが印象的。

* 妹のシュリは知的で脱ステレオタイプの現代女性の象徴といえる。最先端のテクノロジーを扱う天才科学者であり、既成概念にとらわれず自由に柔軟に対処する。現代の若者たちにとっての理想の人物像が描かれているのでは。

* 微妙な食い違いがある間柄の兄弟対決のアクションは迫力がある。「影の議会」という悪に対峙する兄。「未来を守るため」という兄の強い思いが、兄弟の関係を和ませていく。

* 幼児から小学生までが楽しめるような勧善懲悪のアクションドラマのシリーズとして期待が持てる。

* MCU（マーベル・シネマティック・ユニバース）の中でも人気の高いブラックパンサーはさすがに面白い。

* 画と音楽も引き締まっていて良い。

- *アクションシーンは流石ブラックパンサーで、俊敏かつ頭が切れる。
- *マスクに入った砂を水で流すシーンなど、こういった細かい描写がマーベルらしい。
- *人物名や地名などの名称が難しいが、それこそがマーベル。ブラックパンサーの世界観で、興味深い。
- *男の子たちが大好きなアベンジャーズの一人。今自分が育てている 27 歳前後の若手俳優たちも、彼のファンである。ヒーローが背負う責任についても学んでほしいと思う。
- *映画は大作で評論家をうならせる作品だった。アフリカはまだ未開の地として見られることが多いが、そんな中、このワカンダ王国が持つ IT 大国で技術は他の大国をも凌駕しているといった設定に胸をすくような爽快感があり、文化とテクノロジーが調和した理想的な世界を見せてくれている。
- *このアニメーションでの作中の独特な表現は、非常にノスタルジックに感じた。高所から撮っているかのようなカメラワークや格闘シーンについても伝統的なアメリカのヒーローものでの手法が実に上手く表現されている。
- *家族内での確執や暗部やトラウマ、そして実はそれらが世界の危機や戦争につながるという部分が上手く表現されている。これはマーベル作品のコアとなるテーマの一つ。鍵となる人物の家族の中の傷が大きく影響しているという部分が、どのマーベル作品にも出てくる。ブラックパンサーもその一人。
- *特に印象深かったのは、主人公のブラックパンサーとハンターが、実は人種が違う義理の兄弟であるという点。
- *ソーとロキの間にも近親間の憎悪が見られるが、それ以上に印象深い。
- *最後に「ここがお前の家だ」とパンサーが、葛藤を乗り越え和解するシーンが印象深い。普通はこういう場合、晩年になってやっと和解できるものだが、まだ若くして心理的葛藤を乗り越えて、その一言を言えたブラックパンサーに勇気の根源のようなものを見せてもらった。
- *ブラックパンサーの黒の色合いは非常に大事。このスーツの色合いは独特で、よく考えて表現すべきところ。この色合いの配色は深みをしっかり表現しなければ、世界観が崩れかねない。どう見えるかも大きく変わるので、配色を大事にしてほしい。
- *マーベルの”金看板“である『アベンジャーズ』シリーズからの派生作品だが、やや迫力に欠けると感じた。
- *実写作品としてあれだけの高クオリティを維持している『アベンジャーズ』だからこそ、どうしても比べてしまう側面があります。アニメーションならではの魅力の追求を期待します。
- *悪を倒すアクションドラマとして、期待されるシリーズである。

- ・ 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置その年月日：
今回の審議会に出された意見については、審議会が開かれた令和 2 年 7 月以降、各番組のプロデューサー、担当者へのフィードバックをはじめ、番組制作会議等で、活用し、さらなる番組の向上のために適切な措置を講じるよう努めていく。
- ・ 審議機関の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表の内容、方法、及び年月日：
令和 2 年 9 月以降に、ホームページに審議会概要を掲載、公表する予定。

以上